棲神

第二〇號　昭和九年十二月發行

宗學の淵源

遠藤是妙

一、身延山の眞價

身延山が宗祖棲神の法窟であり、眞の靈山事の寂光土であることや、又全體が妙法の山であり、開會の山であることなども、本誌の前前號に亘つて之を述べたが、これは但だ身延山の宣傳ではなくして、身延山の眞價を認識せしめたい爲めであつた。所謂祖廟中心の眞意を徹底せしめたいためであつた。畏くも先帝陛下より大師號の御宣下、又今上陛下より　立正の勅額を奉戴し得たことは、各宗派を問はず緇素一同無上の幸榮とするところであつた。是等大師號の宣下書も勅額も共に身延山に奉藏することになつたのは、大上人墳墓の地なるが故である、祖廟の在る處そこに宗祖の御魂魄は永遠に宿らせ給ふが故である。少くとも祖廟を中心として身延全山其靈域であらねばならぬ、祖廟と本山とを別にして考ふるが如きは哀れせまき智惠袋である。「墓をは身延山に立てさせ給へ心は身延山に住むべく候」との仰せは、まさか鷹取山麓身延川邊掌大の地に限られたものではあるまい、設令御庵室は御粗末ながら現在の舊地に在つたとしても、所謂身延山の境內は四山四河に圍まれたる廣いものであつたに相違ない。それは身延山御書を始め、在山中御認めの諸御書に明かである。それが御言葉の通り身延山の麓に於て仰ぎ見らるゝ限り、全部を拂下げて身延山の所有に歸したことは、復古であると共に大發展の端兆と觀るべきである、即ち御在山中九箇年の讀經唱題は、山

に響き水に和し、草木にまでも泌み込んで、六百五十余年後の今日、猶ほその古を物語つて居る樣で、そこに每もながら言ひ知れぬ尊とさを覺ゆるのである。顧みて聖書の跡を回想すれば、小湊は生處、清澄は得度、鎌倉は轉法輪、池上は入涅槃、何れ劣らぬ靈境には相違ないが、身延山ほど幽邃閑雅でもなく高壯神嚴でもない、龍口佐渡は忍難の極地で、所謂死線を越へたる信念の發露として、當身の大事を顯はされた處は、一層有り難いが、それは教觀精微の御主張にあるので、御生活としては未だ安住の地を得るに至らなかつた。然しやがて赦免を得て宗教的安心の生活を得べき覺悟は有つて居られた。身延山に於ける晩年の御生活はそれであつた、これこそ大聖人の生きた理想境であつたに相違ない。誠に身延山の栖は天竺の靈山其儘だ、否其れにも勝れた淨土であると思召し、(南條書二〇七〇)身のうき雲も晴れぬべきこの山中に、九箇年の間心安く法華經讀誦(波木井書二一一四)と仰せある上に、その功德は虛空にも餘りぬべし(四條書一九八六)と宣ひし御意は、身延山を中心として普く宇宙に遍滿すべき廣大の理想を云ふたものであらう。即ち釋尊の三界我有皆是吾子の思想は、大聖人をして第一に富める者は日蓮なりと呼ばしめてゐる。これから見れば身延全山の所有權は、かゝる知見の一分にも値いせぬであらう。

身延山の山容水態其の景色に於ては、未だ誇りとするに足らぬであらう、身延山より景色のよい處、價値のある山は隨分外にある、然しそれは單に眺望に於て或は金銀等を產出する上に於てのみ言はるゝことで、それは世俗的物質的の價値に過ぎない。身延山は其の風光に於ても俗氣を離れた佳いお山である上に、大上人が其の色心を投じて、盡未來際此處に止住あらせ給ふことが、他に比類なき絕對價値の存する處である。況んや三世の諸佛十方の諸佛菩薩も此の砌にをはすと宣ふに於てをや其の意味に於ては全山は十界事常住の大曼荼羅相である。而して今日は前述の如く大師號の宣下書並に勅額を奉藏するに至つてゐる。全く日蓮が弟子檀那等は此山を本として參るべし(波木井書二一一

三)と仰せになつた筈である。

二、行學二道の唱導

大上人が身延入山までの御生涯は、護法愛國の運動であり惡戰苦鬪の歷史である、それが生きた法華經の行動であつたが爲めに、重疊せる留難は寧ろ法華色讀の體驗であり、佛格更生への無上の試練であつた。斯くして完成したる靈格と本化獨自の大主張とを齎らして、正に身延山に入らせられたのである。即ち開宗以來の活動期より圓熟期に、動的生活より靜的生活に移つて、最も意義深き晩年を過されたのである。御年五十三歲より六十一歲までの九箇年、凡俗ならば世を悴に讓つて漸く樂隱居の年輩なるにも拘らず、自ら行學の二道を實際的に、身を以て指導遊されたことは寔に學徒信徒の洪範とせねばならぬところである。この行學二道の奬勵は既に佐渡に於て「行學の二道をはげみ候べし行學絕えなば佛法はあるべからず、我もいたし人をも敎化候へ、行學は信心よりをこるべく候」と仰せになつて、我もいたしとて御自身先づ其の實行をなされたのである。世間往々言行の一致せざる者ある世に、これ丈でも誠に尊いことである、即ち强盛の信心に基いて唱題の妙行を勵み、終日助行としての讀誦は勿論、每日の樣に身延山の絕頂に登つては、遙に房州の空を仰いで父母の菩提に回向し、且つ國家安穩の祈念をなされたと云ふことである、これは法華經を眞の孝經と拜する思召を實踐せられたもので、國に對する國難打開の大忠を畫すると共に、國民道德の大本を實演したものに外ならぬ。又學道に於ては晝は終日一乘圓頓の御法を論談し(身延山御書一二九七)、或は晝夜に法華經を讀み朝暮に摩訶止觀を談す(松野殿妙房書一八五九)とあれば、絕えず本化の知見を以て法華や止觀を繙讀せられてゐたことはよく解ります。加之其間或は御著述或は御消息等、遺文に錄するもの大凡二百四十ほど數へらるゝより見れば、聊かも安逸の暇とてなかつたことは充分に拜察せらるゝのである。如何に兼知未萌の聖者と雖も、學を廢

することは出來ないと見へる、宗祖は既に諸山に遊學して一代藏經を周覽すること數回、其他神道歌道書道に至るまで普く世出の學に達せざることなきほどなるに尙ほ斯の如くである。吾等初心の末輩が聊かの學說を衒つたり、徒に他の學說を批評することを休めて、一生懸命に己が學道を勵まねばならぬと思ふ、此點に於て大上人が身を以て學の指導をなされたことは、眞に難有いことであると深く感銘する次第である。

三、宗學の淵源

宗學と云ふことは通漫に云へば、既成宗教の學的研究に相違ない、然しこれを吾宗の上で云へば、具體的其の研究の對象を明にすることが出來る、即ち日蓮宗の學問としては、本化の知見(御遺文の指南)に從て法華經を研究することで、法華經は釋せらるゝ經體、御遺文は能く釋する說明書といふことにもなるのである。

大上人はこの法華經の眞理即ち精神を證得遊ばされたことが、既成の宗教を打破してもこれを唱導せざるを得なかつたので、これが抑も立宗の本淵なのである。而してその證得の次第が、單なる研究のみの結果ではなくして、法華色讀の體驗と周圍の世相から見て、益々自身本化上行の自覺に到達し本佛との感應交通によつて、神力品の結要付屬を直接我身の上に信證したのであるから、「學道も亦信心よりをこるべく候」(諸法實相候九六四)と仰せになつたのである。この信念は佐渡に於て初めて發表(富木書七〇二)せられたけれども、本佛より親授の相承は身延山に來て始めて明かになつてゐる。即ち教主釋尊の一大事の祕法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に祕して隱し持てり。(南條書二〇六九)と述べ、入山最初の法華取要鈔(一〇四二)にはこの祕法を說明して、「本門の本尊と戒壇と題目の五字となり」と云はれて居る、これは壽量文底の祕法即神力別付の要法も別開すれば三大祕法になるといふことで、三大祕法鈔(二〇五四)には「此三大祕法は二千余年の當初地涌千界の上首として日蓮慥に教主大覺世尊より口決相承せし

也」と其本源を明にして居る。是に於てか宗學の對象たる法體とその淵源とを曉めることが出來た、それが身延の靈山であるといふことに於て、無限大の價値と光輝とのあることを信ずる。試に天竺の靈山に比せんか、彼處には一部の法華經を說いて八箇年の敎化に限る、今の身延山には最要の妙法五字を弘めて萬年救護の妙用を顯はす、靈山より勝れてゐるとはこの邊から判ずるのである。比叡山との比較に於ては、これ以上の懸隔と高下がある、即ち彼處は雜亂の道場であり此處は純一妙法の道場であるからだ。この妙法五字は簡短なれども能く法華一部の始終を貫く最要の法であるから、禮記の所謂王ノ言如レ絲と云ふが如きもので、末は長く廣く國民に行き亘る作用を有するのである。その祕法弘通に最も關係の深い五綱判の如きは、撰時鈔に時綱を中心の眼目として廣く他の四綱をも述べて居る、其他宗學の細目にわたるものは今敢て贅せず。寧ろ身延山に於ける宗學講談の端緒として、御義口傳と日向記とを特筆すべきであると思ふ。

興起の御書(一六五七)には「人夫なくして學生共をせめ」と云ひ。地引御書(二〇八〇)には「三十余人を以て一日經書き參らせ」とあり、又曾谷書(一八七二)には「今年一百余人の人を山中に養ひて十二時に法華經を讀ましめ談義して候ぞ」とあるより見れば、當時六上足以外に大上人を敬慕して參集せる者相當に多かりし樣にも窺はれる。就中六老僧の所望に依つて、法華開結十卷三部の最要文を集め、一一妙法五字に結歸して、我自身の本意を講談せられたそれを興師の筆記したのが御義口傳と申す二卷の書であり、又其後の御講談を向師の聞書せられたのが日向記である。

要之身延山は宗學の中心たる妙法五字の發源地であり、又一切諸法が妙法五字に結歸すべきを顯はされた最初の學園である。是を以て歷代の山主は山內に談林を設けて的當の指導をなされたのである、殊に近代三村修尊前、以來そ

の古を偲びて、或は大學院を設立し、或は今日の如く學院を組織するに至つたのは誠に其の源の遠きを思ふのである而して固より宗學の專門道場なりしことは云ふまでもない、この意味に於て宗學も亦身延を研究する者の主要なる一方面と稱すべきであらう。